

大谷遺跡群 1

— 第2次調査 —

大野城市文化財調査報告書 第174集



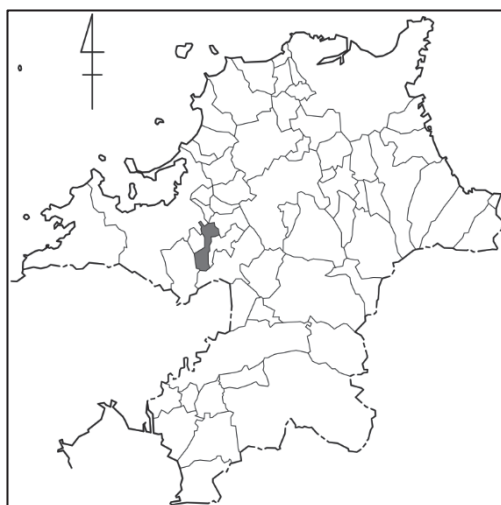
2019

大野城市教育委員会

大谷遺跡群 1

— 第2次調査 —

大野城市文化財調査報告書 第174集



2019

大野城市教育委員会

序

福岡県大野城市は福岡平野の南部に位置し、西暦665年に築かれた日本最古の朝鮮式山城「大野城」にその名を由来する、古い歴史と豊かな自然に恵まれた街です。特に市の南部には、6世紀中頃から9世紀中頃にかけて須恵器を焼いた窯跡が数多く見つかっており、「牛頸須恵器窯跡」として国の史跡に指定されています。これまでに300基以上の窯跡が調査され、未調査の窯跡も含めると500基を超えるものと考えられています。

今回報告する大谷遺跡群は、この牛頸須恵器窯跡の一角に位置しています。過去に1度、国土館大学の川清先生を中心に発掘調査が行われており、7世紀の窯跡が4基確認されています。今回の調査は約50年ぶりの調査であり、窯跡の存在をうかがわせる須恵器のほか、平安時代後期の土器も出土しました。こうした資料は須恵器の生産が終了した後の、牛頸山と人々との関わりを明らかにする上で重要な手がかりとなりました。

本報告書により発掘調査の成果が広く世に知られ、その成果が教育や学術の分野で広く活用され、ひいては文化財への関心が高まることを心から願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書作成にあたり多大なるご理解・ご協力をいただきました福岡県福岡農林事務所ならびに関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成31年2月28日

大野城市教育委員会
教育長 吉富 修

例 言

1. 本書は、大野城市教育委員会が治山ダムの建設にともなって実施した、福岡県大野城市大字牛頸2181番30他所在の大谷遺跡群第2次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、福岡県福岡農林事務所の委託を受け、大野城市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、山元瞭平・神 啓崇・澤田康夫が担当した。
4. 調査写真は、山元瞭平・神 啓崇が撮影した。
5. 遺物写真は、(株)写測エンジニアリング(牛島 茂)が撮影した。
6. 調査区平面実測図は、山元瞭平が作成した。
7. 遺物実測・拓本・製図及び遺構図製図は、山元瞭平が行った。
8. 本書に使用する土色名は、『新版標準土色帖』農林水産省技術会議事務局監修を使用した。
9. 本書中の方位は座標北を示す。
10. 本書に掲載した遺跡分布図は、国土交通省国土地理院発行の25,000分の1地形図『福岡南部』・『不入道』を使用した。
11. 本書に使用する出土遺物・実測図・写真は、大野城市教育委員会にて保管・管理している。
12. 本書の執筆は、山元・柴田 剛が行い、編集は山元が行った。

本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査組織	1
II. 位置と環境	
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
3. 既往の調査	3
III. 調査成果	
1. 調査の内容	5
2. 出土遺物	6
IV. 総括	7

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)	4
第2図 調査地点位置図 (S=1/1,000)	5
第3図 調査区実測図 (S = 1/80)	6
第4図 出土遺物実測図 (S=1/3)	7

表目次

第1表 遺物観察表	7
-----------	---

図版目次

図版1 (1) 調査前全景 (北東から)	(2) 調査区全景1 (北東から)
図版2 (1) 調査区全景2 (南西から)	(2) 土層堆積状況 (北東から)
図版3 遺物写真	

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

調査対象地は大野城市大字牛頸2131-30・31・32であり、周知の埋蔵文化財包蔵地「大谷遺跡群(窯跡群)」にあたる。平成28年12月に対象地に関して、福岡県福岡農林事務所から治山ダム建設にともなう試掘調査の依頼書・承諾書が提出された。これに基づき、平成28年12月7日から平成29年1月7にかけて試掘調査を実施したところ、現地表下80~120cmの深さで遺構を確認した。計画通りに工事が施工されると遺跡が破壊されるため、事業者との協議を重ねたが、遺構保護は設計上困難であることから、当初の計画通り治山ダムの建設が行われることとなり、遺跡が破壊される部分の発掘調査が必要となった。

事業者からは、建設予定の図面を添えて平成29年2月16日付けで発掘届を福岡県教育庁文化財保護課あてに提出し、平成29年3月14日付け28教文第1号-1439にて発掘調査を実施する旨、指示が出された。また、平成29年4月20日付けで埋蔵文化財発掘調査の依頼書・承諾書が市に提出された。

これを受け、発掘調査は平成29年度、整理・報告書作成は平成30年度に実施する旨、協議書を締結し、年度ごとに委託契約を締結し事業を実施した。

調査面積は、事業対象面積3,050㎡のうち約35㎡である。平成29年5月23日から同年6月2日まで発掘調査を実施し、平成30年5月1日から平成31年2月28日まで整理作業及び報告書作成作業を実施した。

2. 調査組織

平成29・30年度における発掘調査ならびに整理作業における調査体制は以下の通りである。

平成29年度（発掘調査）

大野城市教育委員会

教育長	吉富 修			
教育部長	平田 哲也			
ふるさと文化財課長	石木 秀啓			
係長	徳本 洋一	白壁 伸太	林 潤也	
主任技師	上田 龍児	龍 友紀	(~ H29.11)	
技師	山元 瞭平	藤井 恵美		
主事（任期付）	坂井 貴志	柴田 剛	(H29.12~)	
嘱託（調査）	澤田 康夫	藤川 貴久	(H27.4~ H29.9)	
	神 啓崇	(H29.4~ H29.9)	柴田 剛	(H29.4~11)
嘱託（啓発）	白濱 聖子			
嘱託（歴史資料展示室）	藤田富美子	山村 智子		
嘱託（庶務）	呉羽 京子	鮫島 由佳		

平成30年度（整理作業）

大野城市教育委員会

教育長	吉富	修					
教育部長	平田	哲也					
ふるさと文化財課長	石木	秀啓					
係長	徳本	洋一	林	潤也	佐藤	智郁	
主任技師	上田	龍児					
技師	山元	瞭平					
主事（任期付）	坂井	貴志（H30.4～9）	鮫島	由佳	柴田	剛	
嘱託（調査）	澤田	康夫	三浦	萌（H30.4～9）			
嘱託（啓発）	山村	智子	浅井	毬菜			
嘱託（庶務）	呉羽	京子	西村	智美			

発掘調査作業員

川崎敏次郎	香野	博通	佐藤	博行	諏訪	博恭	田中	良一	吉田	秀俊
山下 宏昭	安部	芳範	仁田	幸男	綱嶋	年朗				

整理作業員

小嶋のり子	白井	典子	津田	りえ	仲村	美幸	町井	裕子	松岡	信子
松本友里恵	村山	律子								

Ⅱ. 位置と環境

1. 地理的環境

大谷遺跡群第2次調査地は、大野城市大字牛頸2181-30他に所在し、大野城市南端から北側に派生する牛頸山の北東斜面に位置する。この牛頸山（標高447.3m）は、脊振山系の一角をなしており、地質的には花崗岩類を基盤とし、その風化土が被覆した状況を呈している。この北麓を牛頸川、足洗川などの中小の河川が開析することによって、無数の丘陵が形成され、この丘陵斜面に数多くの須恵器窯跡が分布している。この窯跡群は「牛頸窯跡群」と呼ばれ、大野城市牛頸地区を中心に春日市の一部から太宰府市の一部（東西約4.0km、南北約4.8km）まで広がっている。

2. 歴史的環境

大野城市南部を中心とした牛頸山北麓地域では、旧石器時代から近世にいたるまでの遺跡が数多く確認されている（第1図）。ここでは古墳時代以降について、簡潔に説明する。

古墳時代になると、九州最大の須恵器窯跡群である「牛頸窯跡群」の操業が開始される。最古相の窯跡は6世紀中頃のもので、窯跡群の北部に位置する本堂遺跡群・野添遺跡群において確認されている。6世紀末から7世紀前半になると、小田浦窯跡群や中通窯跡群をはじめ、数多くの窯が操業され、操業範囲・生産規模ともに拡大する。窯も大型のものが増加し、多器種を大量に生産したようである。また、牛頸窯跡群に特徴的な複数の排煙孔を持つ「多孔式煙道窯」の登場もこの時期である。小田浦窯跡群や月ノ浦遺跡では須恵器に加えて瓦も焼成しており、那津官家と目される福岡市那珂遺跡へ供給されたことが判明している。

当該期の集落は上園遺跡、塚原遺跡、日ノ浦遺跡、惣利西遺跡などで確認されており、その一部は粘土貯蔵穴や焼け歪んだ須恵器などの存在から須恵器工人の集落と考えられる。一方古墳は、後田古墳群や中通古墳群などがあり、窯の操業と連動して築造されている。さらに、梅頭遺跡1次調査では、廃窯後に鉄刀・鉄鏃等を副葬し「墓」として転用した事例も確認されている。

奈良時代になると、さらに操業範囲を広げ、生産規模も拡大する。ハセムシ窯跡群、井手窯跡群など群集して操業される例が多く、小型器種中心の生産へと転換する。続く平安時代には、生産規模が大きく縮小し、9世紀中頃に位置付けられる石坂窯跡群E3号窯跡を最後に終焉を迎える。

3. 既往の調査

大谷遺跡群の調査は、本報告で2回目を数える。1次調査は、昭和43年（1968年）に福岡県の依頼を受けた国士舘大学の川清先生により実施された。調査地は、現在の牛頸浄水場の南東側、平野台3丁目2-43付近にあたり、調査時の地形はすでに削平を受け残っていない。本調査では窯跡が4基確認されており、遺物から7世紀代の窯跡であることが判明している。特に3号窯跡は、牛頸窯跡群に特徴的な複数の排煙孔を持つ多孔式煙道窯である。調査時の図面・写真・遺物類は大野城市教育委員会に返還いただいたが、報告書は未刊である。今後整理を行い、その成果について明らかにしたい。



【春日市】

1. 惣利遺跡 2. 惣利西遺跡 3. 惣利東遺跡 4. 惣利北遺跡 5. 向谷北遺跡 6. 平田北遺跡 7. 円入遺跡
 8. 春日平田遺跡 9. 春日平田西遺跡 10. 春日平田東遺跡 11. 浦ノ原窯跡群

【大野城市】

12. 梅頭遺跡群 13. 本堂遺跡 14. 上園遺跡 15. 永福遺跡 16. 天神田遺跡群 17. 末次遺跡 18. 谷川遺跡 19. 唐土遺跡
 20. 父子嶋遺跡 21. 矢倉遺跡 22. 小水城周辺遺跡 23. 上大利小水城跡 24. 谷蟹遺跡群 25. 野添遺跡 26. 野添窯跡群
 27. 花無尾遺跡 28. 平田1・2号窯跡 29. 横峰I遺跡 30. 横峰II遺跡 31. 屏風田遺跡 32. 日ノ浦遺跡 33. 塚原遺跡群
 34. 畑ヶ坂遺跡 35. 下ノ原遺跡 36. 月ノ浦遺跡 37. 正楽寺跡 38. 胴ノ元古墳 39. 胴ノ元窯跡 40. 胴ノ元遺跡
 41. 大行事遺跡 42. 平野遺跡 43. 城ノ山窯跡・不動城跡 44. 中通古墳 45. 中通遺跡 46. 中通古墳群 47. 中通窯跡群
 48. ハセムシ窯跡群 49. 長者原遺跡群(窯跡群) 50. 笹原遺跡群(窯跡群) 51. 足洗川遺跡群(窯跡群)
 52. 井手遺跡群(窯跡群) 53. 原窯跡 54. 原浦遺跡群(窯跡群) 55. 大谷遺跡群(窯跡群) 56. 石坂窯跡群
 57. 後田遺跡群(窯跡群) 58. 小田浦遺跡群(窯跡群)

【太宰府市】

59. 島本遺跡 60. 神ノ前遺跡 61. 篠振遺跡 62. 宮ノ本遺跡

第1図 周辺遺跡分布図 (S = 1/25,000)

Ⅲ．調査成果

1．調査の内容

大谷遺跡第2次調査地は、牛頸山から北側に派生する丘陵上に位置し、大野城市大字牛頸2181-30他に所在する（第2図）。調査原因は、福岡県福岡農林事務所による治山ダムの新設とそれに付随する作業路の整備である。

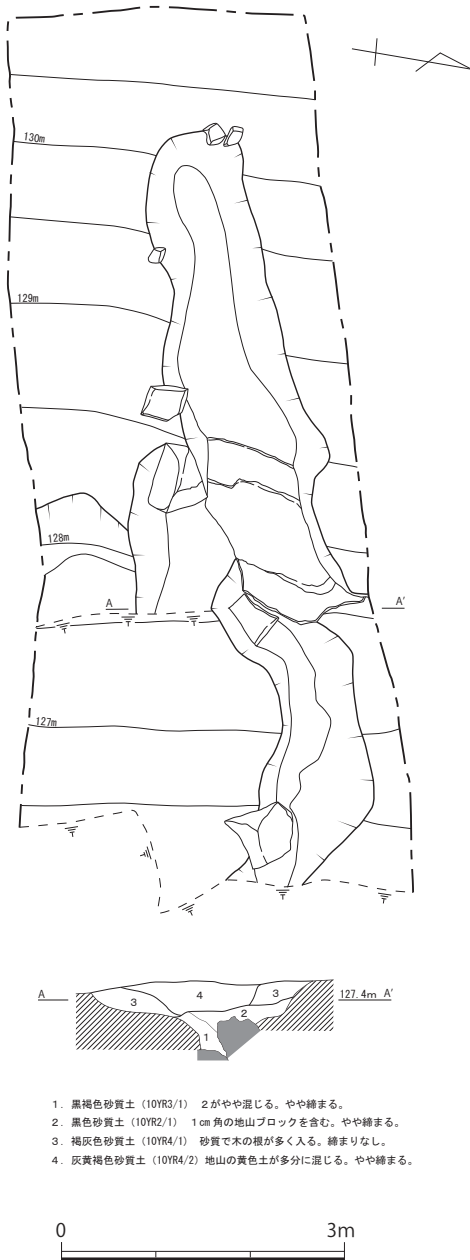
試掘調査 対象地は試掘調査が実施されていない地点であり、遺構の有無は全くの不明であった。そこで、平成28年12月7日から平成29年1月7日にかけて、遺構が想定される範囲を対象に試掘調査を実施した。調査は作業員による人力掘削で行い、0.5m四方の試掘坑を2mの間隔で設定することで遺構の把握に努めた。その結果、一部の範囲において黒色砂質土を検出した。黒色砂質土は須恵器窯跡の灰原に由来する堆積土の可能性を想定し、この部分の試掘坑を拡張したところ、黒色砂質土が帯状に広がるような状況を確認した。また、トレンチ掘削時には須恵器・土師器の破片が出土し、周囲に遺構が存在する可能性が高まった。

本調査 一連の試掘調査を受け、遺構の存在が想定される黒色砂質土検出地点を本調査の対象とした。対象地は標高126～131mの東向きの斜面であり、緩やかな谷地形を形成している。調査面積は約35㎡で、黒色砂質土の検出地を中心に、等高線に対して直行するような形で調査区を設定した。

調査は平成29年5月12日から同年6月2日まで実施した。5月12日からバックホーによる表土剥ぎを開始し、5月23日から作業員による遺構検出と掘削を行った。その後、写真撮影と調査区の実



第2図 調査地点位置図 (S = 1/1,000)



第3図 調査区実測図 (S = 1/80)

かに内湾しながら口縁へ至る。口縁端部は丸くおさめる。内外面ともに回転ナデ調整である。残念ながら接合する底部片はないが、こうした破片のなかには2と同一の色調・胎土をもつものが存在する。これを観察すると、底部は丸底を呈し、外面は回転ヘラ切りであることが分かる。

3は須恵器の杯身である。口縁から体部下半にかけて残存しており、口径は14.8cmを測る。体部は外傾しながら直線的に延び、口縁端部は丸くおさめる。体部下半から底部にかけての屈曲部がわずかに残存しており、この部分は丸みを帯びている。底部を欠くため、高台の付くものかどうか分からない。内外面ともに回転ナデ調整である。

4は須恵器であるが、小片のため器種は不明である。杯類にしては厚みがあるため、鉢などの中型器種になるものであろうか。器壁は外傾しながら直線的に延びる。内外面ともに回転ナデ調整で、内面にはロクロ目が明瞭に残る。

測を行い、6月2日までに埋め戻しを含めた全ての作業を終了した。

調査の結果、調査区中央において、谷筋に沿うように長さ8m、幅60cm、深さ20~40cmの溝のような落ち込みが確認された。しかし平面・断面形態ともに不正形で、人為的掘削によるものである可能性は低い。また、埋土には花崗岩の転石が多く混じるような状況で、遺物も全く出土しなかった。

以上を踏まえると、谷筋に流れ込んだ雨水が地山を開析することで溝状の落ち込みが形成され、その後土砂が流れ込み埋没したもの、つまり自然の堆積と考えるのが妥当であろう。

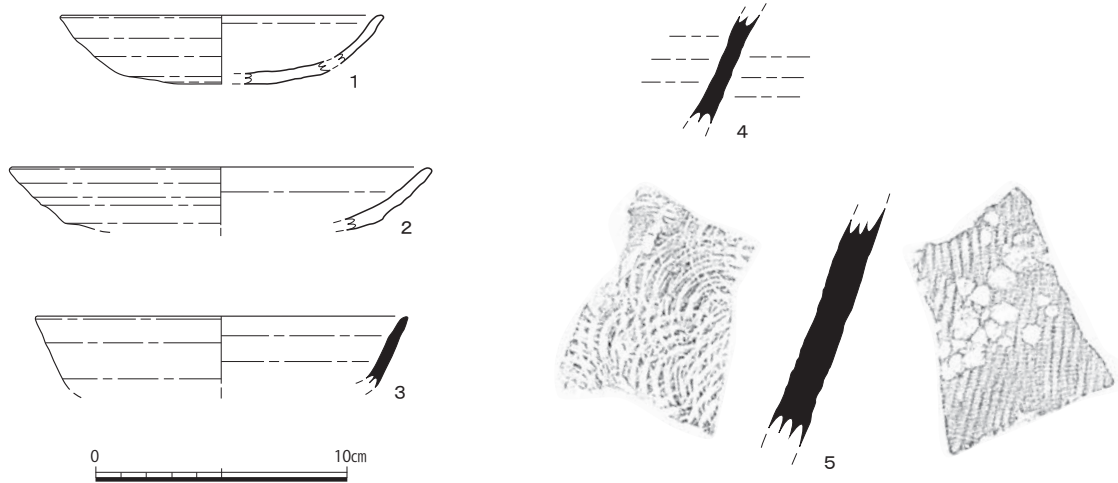
2. 出土遺物 (第4図、図版3)

遺物は試掘調査時および本調査のトレンチ掘削時に土師器や須恵器が出土した。

1は土師器の丸底杯である。2とともに小片の状態出土した。口縁から底部にかけて残存しており、口径12.8cm、器高2.7cmを測る。体部は内湾気味に延び、口縁部はわずかに外反する。口縁端部は丸くおさめる。体部下半から底部にかけては丸みを帯びている。内外面ともに回転ナデ調整であり、底部外面には回転ヘラ切りの痕跡が残る。

2は土師器の丸底杯である。1と同様に小片の状態まとまって出土した。口縁部から体部下半にかけて残存する。口径は16.8cmと1に比べ大型である。体部はわず

5は須恵器甕の胴部片である。器壁の厚さは1.2cmを測ることから、中型あるいは大型の個体と推測される。内面は同心円文当具痕、外面は平行タタキ調整である。外面をよく観察するとタタキ板の木目が浮き出ており、やや擬格子化していることが分かる。これは使用されたタタキ板が木目に対して直交に刻み目の施されたものであることを示している。なお、外面には径1cmほどの剥離痕跡が複数確認できる。



第4図 出土遺物実測図 (S = 1/3)

第1表 遺物観察表

遺物番号	種類	器種	出土地点	①口径 (cm)※()復元値	②器高 ()復元値	形態・技法の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
1	土師器	丸底杯	試掘トレンチ	①(12.8)	②(2.7)	内面は回転ナデ。口縁～体部外面は回転ナデ。底部外面は回転ヘラ切り。	A:密。1mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:(外)にぶい橙7.5YR7/3 (内)にぶい橙7.5YR7/4	
2	土師器	丸底杯	試掘トレンチ	①(16.8)		内外面回転ナデ。	A:密。1～2mm程度の石英・長石粒を含む B:良好 C:(外)にぶい橙7.5YR7/3 (内)にぶい橙7.5YR7/3	
3	須恵器	杯身	試掘トレンチ	①(14.8)		内外面回転ナデ。	A:密。1mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:(外)黄灰2.5Y5/1 (内)黄灰2.5Y5/1	
4	須恵器	不明	トレンチ掘削時	-		内外面回転ナデ。	A:密。0.1mm以下の白色砂粒をわずかに含む B:良好 C:(外)黄灰2.5Y6/1 (内)黄灰2.5Y6/1	
5	須恵器	甕	試掘トレンチ	-		内面は同心円文当具痕。外面は平行タタキ。	A:やや粗。1～3mmの石英・長石粒含む B:良好 C:(外)黄灰2.5Y5/1 (内)黄灰2.5Y5/1	外面に複数の剥離痕

IV. 総括

調査の結果、人為的掘削を伴う明確な遺構は確認できなかった。しかしながら、人々の活動をうかがわせる土器が少量出土した。ここでは出土資料に着目し、その評価を行いたい。

出土した土器は須恵器と土師器に大別できる。前者はいずれも小片であり、明確な時期位置付けは難しいが、第4図3の形態から8世代の所産と推定される。今回調査を行った地点から南東に約60mの地点には国指定史跡「牛頸須恵器窯跡」の一部である大谷窯跡群Ⅱ地区がある。同指定地は、本調査地と同一の谷筋に位置し、8世紀代の窯跡が確認されている。こうしたことから、今回出土した須恵器は周辺に窯跡の存在を示唆するものと考えられるだろう。

一方土師器は、丸底杯が2点出土した。山本信夫氏による土師器編年に照らすと、Ⅱ期頃（11世紀後半頃）に位置付けられる。今回のように山中で土師器が出土する事例は、平成25年に実施した井手窯跡群の確認調査でも認められている（石木編2015）。この際も11世紀中頃から後半の丸底杯が単独で出土した。これらは遺構から出土したものではないが、裏を返すと山中での短期的あるいは単発的な活動に伴うものと推測される。こうした土器の位置付けは、牛頸山と人々との関わりを解明する上で重要な資料といえる。そこで、牛頸周辺における11世紀を前後する時期の遺跡動向を整理したうえで、若干の考察を行いたい。

大野城市域の古代末から中世における集落動態については、朝岡俊也氏による詳細な分析がある（朝岡2017）。ここでは氏の検討によりながら、牛頸地域の集落動態について概観する。

牛頸地域は、昭和30年代以降大規模な宅地開発が行われていたが、これ以前は広大な山林が広がっていたことが知られる。近世以前の集落は、牛頸川により開析された狭小な平地部に展開しており、日ノ浦遺跡や塚原遺跡などがあるが10世紀にはほぼ終息し、11世紀以降の遺構や遺物は少ない。一方で、6世紀末から7世紀代の古墳が多数確認された中通遺跡群では、11世紀後半頃から13世紀にかけて石室内に土師器を供献する事例がみられることから、周辺に集落の存在が推測される。また、須恵器生産は9世紀中頃の石坂窯跡E地点を最後に終了するが、このE地点では10世紀まで土師器・黒色土器を焼いた可能性があるほか、13世紀には炭窯も操業されており、小規模ながら生産活動が続いたようである。このように現在までの調査状況をみると、牛頸地域における11世紀代の集落動態は低調と言わざるを得ない。

それでは、当該期の集落の中心はどこであったのかというと、牛頸山から北へ延びた丘陵と平野部が接する地域、現在の上大利地域が中心と考えられる。上大利地域を代表する本堂遺跡群では、草堂とみられる建物跡をはじめ、11世紀代の遺物が大量に出土している。さらに注目されるのは、土器焼成に関わる遺構・遺物が集中する点である。本堂遺跡群や小水城周辺遺跡、谷川遺跡では、11世紀後半代の土師器とともに土器焼成に関する遺物と目される棒状土製品が出土している。また、天神田遺跡群では棒状土製品に加え、瓦器焼成遺構も確認されている。このように上大利地域における集落の盛行と牛頸山で確認した土器の時期が重なることは、無関係とは言えないだろう。

ここからは推測になるが、牛頸山での活動というのは具体的には森林資源の獲得、さらに踏み込んで述べると、日常的な消費に加えて土器生産に必要な燃料の獲得ではないかと考えられる。ただし現状では、上大利地区における集落の盛行と牛頸山の土器が同時期にあたる、ということ以上に両者を結びつける考古学的資料はない。今後は、土器の搬入元を明らかにする必要があるほか、土器の出土状況にも注意を払う必要がある。また、牛頸地域における当該期の集落の調査が進むことで、より具体的な活動を復元することができるだろう。

参考文献

- 朝岡俊也 2017「大野城市域の中世村落－貿易都市博多の周辺1－」『七隈史学』第19号 七隈史学会
石木秀啓編 2015『史跡牛頸須恵器窯跡指定地周辺確認調査』大野城市埋蔵文化財調査報告書第124集 大野城市教育委員会
山本信夫 1990「統計上の土器－歴史時代土師器の編年研究によせて－」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会

圖 版



(1) 調査前全景（北東から）



(2) 調査区全景 1（北東から）



(1) 調査区全景2 (南西から)



(2) 土層堆積状況 (北東から)



遺物写真

報告書抄録

ふりがな	おおたにいせきぐんいち								
書名	大谷遺跡群 1								
副書名	第2次調査								
巻次	1								
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第174集								
編著者名	山元瞭平								
編集機関	大野城市教育委員会								
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1 電話092 (501) 2211								
発行年月日	2019年2月28日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
おおたにいせきぐん 大谷遺跡群	ふくおかけんおおのじょうしおおあざ 福岡県大野城市大字 うしくび 牛頸2131-30・31・32		402192		33° 29' 16"	130° 28' 5"	2017年 5月12日 ～ 2017年 6月2日	35㎡	治山ダム 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
大谷遺跡群	生産遺跡	古代	—	土師器・須恵器					
要約	調査の結果、明確な遺構は確認できなかった。しかし、窯跡に関連すると思われる8世紀代の須恵器が出土した。また、11世紀後半頃に位置付けられる土師器も確認した。これらの土師器は、人為的活動を示すものといえ、牛頸窯跡群が操業を終了した9世紀後葉以降における牛頸山と人々の関わりを明らかにするうえで重要な資料といえる。								

大野城市文化財調査報告書 第174集

大谷遺跡群 1

平成31年2月28日

発行 大野城市教育委員会

〒816-8510

福岡県大野城市曙町2-2-1

出版 九州コンピュータ印刷

〒815-0035

福岡市南区向野1丁目19番1号